

鉄をめぐる古代交易の様相-楽々福神社鬼伝承を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院文学研究科 公開日: 2015-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堂野前, 彰子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16998

鉄をめぐる古代交易の様相―楽々福神社鬼伝承を中心―

Ancient Iron Trade : Study on ONI's folktales in Sasafuku Shrine

堂野前 彰子

Donomae Akiko

【要旨】

伯耆には日野川という川がある。その川は、鳥髪山をとりまくように東流して日本海へと注ぎ、八俣大蛇退治のモデルとなった斐伊川に同じく、砂鉄の採れる川であった。その流域には楽々福神社とそのゆかりの神社が点在し、孝霊天皇とその一家による鬼退治伝承が伝えられている。まさに楽々福の「フク」とは「吹く」の意で、蹈鞴に風を送り込むことを示しており、そこに祀られている楽々福神とは鉄神のことであれば、中国地方に広く信仰されている鉄神金屋子神の古形であった。

また、孝霊天皇とともに楽々福の鬼退治をしたと伝えられる吉備津彦は、記紀では吉備平定に向かった四道將軍であり、その地で温羅と呼ばれる鬼を退治したという。楽々福鬼伝承にはこのように様々な変奏があつて、それら伝承の地を結びと、吉備から伯耆、出雲を経て隠岐へと繋がる一筋の道が浮かび上ってみえてくる。それ

は鉄を求めて行われた四道將軍の征伐の道であり、中国山地を横断するようにして走る鉱脈に他ならない。鉄に携わる人々が移動した痕跡であり、そのような人々によってもたらされた製鉄技術の伝播の道でもあった。楽々福鬼伝承の背後には、このような鉄をめぐる古代交易があつたのである。

キーワード… 楽々福神社、鬼退治、鉄、孝霊天皇、吉備津彦

目次

はじめに

1 楽々福神社の鬼退治

2 孝霊天皇と福姫

3 吉備津彦と鬼退治

むすび

はじめに

天の岩屋戸の騒ぎを起こしたスサノヲは、高天原から「避追はえ」られて出雲肥の河上の鳥髪山に降りきて、その地で人々を苦しめていた八俣の大蛇を退治する。そこから『古事記』の出雲神話ははじまっている。

ここに登場する鳥髪山とは、伯耆と出雲の境に位置する今の船通山のことであり、その山を水源とする斐伊川は、西に流れて宍道湖（かつては神西湖）へと注いでいる。それは流れが定まらない暴れ

川で、その流域から多くの砂鉄が採れることから、斐伊川こそ八俣の大蛇のモデルだとされてきた。おそらく鉄分を含んだ川の氾濫伝承が、このような神話を生んだのであろう。人間の力及ばぬ「自然」を象徴するのが暴れ川であり大蛇であり、人間が「自然」を支配し始めたことを語る物語が八俣大蛇伝であった。

ところでその船通山を水源としているのは、斐伊川だけではない。その山を取り巻くようにして日野川も流れている。それは奇しくも「肥の河（斐伊川）」と同じ「ヒ」の川であり、その「ヒ」とは、一説によれば鳥上山の麓に祀られている「樋速日子命」の「樋」で、砂鉄を採るために濁流を流す樋のことであるという⁽¹⁾。その川は斐伊川とは反対に東流し安来から日本海へと注いでいて、その川沿いに楽々福祉社とそのゆかりの神社はある。菅福祉社など「福」がつく福祉は、楽々福祉社と関係のある神社に違いなく、「福」とは「吹く」のこと、製鉄の際鉄人が踏み踏躰に風を送り込むことを意味している。まさに楽々福祉社とは製鉄に関わる人々が奉祭した神社であり、日野川流域には八俣大蛇とは異なる製鉄伝承があったのである。

1 楽々福祉社の鬼退治

鳥取県日野郡溝口町宮原にある楽々福祉社神主の蘆立家には、「上古ハ砂鉄ノ事ヲ須佐トモ佐々トモ言テ、楽々福祉ハ鉄穴多々良場ノ守神ナリ。此ノ神ノ縁起次ノ如シ。」とはじまる、次のような縁起が

伝えられている⁽²⁾。

伯耆を巡幸していた折、孝靈天皇はこの地に住む悪鬼の兄弟が眷族を率い人々を悩ませていることを知り、鬼退治をしようとして南にある高い山に登った。山頂で鬼退治の計略を考えていると里人が笹苞団子を献上し、その団子を食った軍勢の士気はあがった。そこでその団子三つを並べて弟の鬼である乙牛蟹をおびき出し、団子を食べているところを射殺した。それに因んでその山を笹苞山と呼ぶようになり、鬼を射殺した大矢口命は神主蘆立家の始祖であるという。このように弟の鬼は退治することができたのだが、兄の鬼を退治することがなかなか出来ない。ある夜天皇の夢の中に天津神天皇が現れ、「笹の葉を刈って待っていると吹いてきた風が鬼を降参させる」という託宣を告げた。笹を刈って待つこと三日、大風が吹き笹の葉が鬼の住む山へと兵を誘った。兵が笹の葉を抱え持つて攻め入ると、鬼たちは笹の葉に纏わりつかれ為す術もない。さらに春風に乾いた笹葉が燃えたので鬼たちは散り散りに逃げ惑い、ここに至って大牛蟹は降参した。これからは北辺を守って天皇に仕えんと申し出たので、天皇はそれを聞き入れ大牛蟹を許した。人々が多いに喜び、百二十三歳でこの地に崩御した天皇の遺徳を偲んで御陵脇に笹葺きの社を建て、「鬼伏大神」として祀ったという。

一読してわかるように、この伝承で鍵となるのは笹である。笹苞団子に笹葉、笹葺きの社に楽々福祉社と「ササ」がつく。「ササ」とは笹の葉が擦れる音であり、神楽の合の手「サッサ」のように神

が降臨する際の擬音語であれば、この地に「フク」の神が降臨したことをササフクという名は示しているのだろう。その「ササ」はまた、古代においては細かいことの意で砂鉄を指し、「笹のあるところに鉄あり」と図式化される。笹の葉が燃え上がる描写が蹈鞴の炎を想起させるように、笹が登場するということは、すなわちその背後に鉄にまつわる物語があつて、その伝承が伝わる地には産鉄に関する遺跡や遺物があるということである。

そのような「笹（ササ）」がこの地では鬼伝承と深く結びついていて、例えば『出雲国風土記』大原郡にも、日本最古といわれる鬼伝承が伝えられている。

古老傳へていへらく、昔、或人、此處に山田を佃りて守りき。その時、目一つの鬼來たりて、佃る人の男を食ひき。その時、男の父母、竹原の中に隠りて居りし時に、竹の葉動けり。その時、食はるる男、「動動」といひき。故、阿欲といふ。

ある男が山田を作つて耕していると、鬼が現れてその男を食べてしまい、男は食われながらも竹原に逃げ隠れている父母に、恐怖のあまり震えているので竹の葉が揺れていると教えた、という伝承である。この阿用郷にある阿用神社（『出雲国風土記』所載）は今も山の斜面にあり、その前面には傾斜を利用した田が広がっている。まさに阿用の鬼伝承に語られているのと同じ風景で、山と里の間に位置するその里に一つ目の鬼は現れるのであつた。一つ目の鬼とはおそらく天目一神という鉄神のことであり⁽³⁾、ここでも竹の葉すな

わち笹がさわさわと動いていて⁽⁴⁾、鉄と笹、鬼の取り合わせが語られている。阿用郷は鉄の産地であり、そこで採れる水鉛は国の生産額の九〇パーセントを占めていたらしい⁽⁵⁾。

しかしこの伝承では、楽々福の鬼伝承と異なつて鬼退治が語られることはない。ただ鉄神と思われる鬼が降りてきて人を食らうということだけで、征伐伝承は語られないのである。一体鬼に食われるというのはどういうことなのだろう。「食われる」といえば一般的に生贄として捧げられたことを意味するのだが、果たしてここに、そのような生贄伝承の残滓を見出すことはできるのだろうか。

その答えは否である。この伝承からはむしろ神隠しのようなものを想像する。なぜなら生贄となるその多くは若い女性であるのに、ここでは男が食われているからである。女ではなく男が食われるということは、男の労働力に注目しているからかもしれない。男は里ではなく山の世界、向こう側の世界に行つてしまつたかのようだ。

つまりこの伝承の背後にあるのは山をめぐる抗争であり、里人からみて山に住み、鉄を産出する人々が鬼として語られているのである。鬼に込められているのは、そのような里人以外の人々のイメージであり、里との接触を持ちながらも境界にうごめく製鉄に携わる人々の姿であつた。鬼とはまさに境界的な存在ではなかったか。となれば、楽々福鬼伝承にも山をめぐる里人と鬼との抗争があり、鬼退治とは里人による山の支配の別名なのであつた。

2 孝靈天皇と福姫

楽々福神社の伝承でもうひとつ注目すべきことがある。それは大日本根子彦太瓊尊、すなわち孝靈天皇である。孝靈天皇とは第七代天皇で、系譜のみで事績が記されない欠史八代（第二代～第九代）のうちの一人であり、その存在は疑わしい。その名にある「ヤマトネコ」という称号が、次代孝元天皇、九代開化天皇、二十二代清寧天皇の三天皇及び、記紀の編纂が最終段階に入った頃の持統天皇・文武天皇・元明天皇・元正天皇の四天皇の称号にもみえることから、持統天皇から元正天皇までの天皇像を投影した、机上で作られた天皇だと一般的には考えられている。

確かにその実在した可能性は低いのだが、今ここで問題とするのは実在したかどうかではなく、孝靈天皇によって鬼退治が行われたと信じられていることである。しかも「紀氏譜記」には、「御丈七尺、御面躰青く、面頭には三尺の角あり。飛行自在の天皇なり」という孝靈天皇の姿が伝えられていて⁽³⁾、あたかも鬼のような容姿の天皇によって鬼は退治されている。鬼のような形相の天皇によって鬼が退治される、それはまさに祀るものと祀られるものの同化であり、柳田国男が「一つ目小僧」で説いた、一つ目の生鬘と神の同化に同じではないか。

柳田国男はその論文の中で、神に捧げられるものは逃走を防ぐために目をつ潰し足一本を折る習慣がかつてこの日本にはあり、それがやがて神として祀られるようになったと述べている⁽⁴⁾。もし仮

にそれが正しいとして、阿用郡の一つ目鬼伝承にそれを当てはめてみるならば、鬼に食われた男は神に捧げられた生鬘で、しかしその実は食う側の鬼そのものでもあったということになる。食われる「里」と食う「山」の関係は逆転し、食われる側の「里」が食う側の「山」を支配し始めたことをこの伝承は語っているのかもしれない。

そのように考えてみると、孝靈天皇も退治した鬼に等しいことになり、楽々福鬼伝承は鬼の大将が鬼を退治した物語であると言い換えられるだろう。孝靈天皇像として鬼のような形相が伝わっているのも、征伐するものとされるものとの同化があつて、鬼の大将としてのイメージがつくりあげられたからではないのか。そして何よりも鬼退治の大将が孝靈天皇という天皇であることは、この伝承に大きな意味を与えている。孝靈天皇による鬼退治とは王権とそれに屈しない異形の人々との抗争のことであり、その結果としての王権の支配がその背後にはある。

その孝靈天皇とその一族を祀る神社が、日野川流域に点在する楽々福神社および関連神社であつた。溝口町宮原の楽々福神社は、孝靈天皇と皇后細比女命を、日野郡日南宮内の東西楽々福神社は孝靈天皇や細姫命、娘の福姫や鬼退治に活躍した吉備津彦などを祀り、同町印賀の楽々神社は福姫のみ、米子市上安曇の楽々福神社は孝靈天皇、細媛命、福姫の三神、島根県能義郡広瀬町石原の佐々布久神社は孝靈天皇ただ一神をその祭神とする。関連社として考えられる日谷神社（日野郡日南町笠木）は孝靈天皇と細比売命、吉備津彦を、

菅福神社（日野郡日野町上菅）は孝靈天皇、細姫命、福姫と吉備津彦などを祀っていて、その他にも孝靈天皇やその一族を祭神とする神社は、山田神社（日野郡溝口栃原）、高杉神社（西伯郡大山町宮内）、余子神社（境港市栄町）などがあり、日野川流域は楽々福の神のゆかりがある。その周辺に福岡などの「福」や上菅、菅沢などの「菅」がつく地名が多くあるのも、その地が鉄の産地であることを示している。「菅」もまた鉄と関係深い植物であり、葦や茅など湿地帯に生える植物の根には鉄バクテリアの作用で褐鉄鋼の団塊が形成され、それが「スズ」と呼ばれるものの原初的な姿であるという⁽⁸⁾。そういえば溝口町宮原の楽々福神社の神主も、蘆立という名ではなかったか。楽々福に関する地名人名は、それが鉄と深く関わりがあることを示していたのである。

またこの地には、楽々福ゆかりの神社の由来を語る、次のような物語が伝えられている。

楽々福大明神というのは福媛とも細媛とも伝えられている孝靈天皇の皇后のことであり、孝靈天皇四十五年、孝靈天皇はその皇后とともに諸国巡幸の折、隠岐島から日野郡吉日に渡ってきて、この地に鬼がおり人民が安心して住めないということを聞いた。悪鬼を退治すべく、里山との境にあるサズト山に陣を取り様子をうかがい、その時サズト山麓に建てた宮が宮原の楽々福神社である。そこから日野川に沿ってさらに奥深く入って、行宮として菅福神社を建てたところ、皇后細姫命が産気づかれ、生山で姫君を出産した。山人に

何か不思議なことはないかと尋ねると、この奥の鬼林山に化け物がいるという。見るとそれは頭は馬、胴体は牛、足は猿のような化け物で、牛鬼と名乗っていた。牛鬼は天皇に追いつめられて殺され、その尾を切ったところは尾切山、胴を切ったところは胴原と名付けられた。その後姫君は十五歳で亡くなり、それを祀ったのが印賀の楽々福神社である。天皇と皇后がともにお住まいになる宮が建てられ、それゆえにその地を宮内と呼ぶようになった。それが今の宮内楽々福神社で、東の宮に天皇、西の宮に皇后がお住まいになった。やがて皇后は百十歳で崩御され、その墓が西宮の背後の崩御山であるという⁽⁹⁾。

これは溝口町宮原の楽々福鬼伝承の後編ともいべきもので、孝靈天皇の兵が鬼退治をしながら日野川を上流に遡っていく様子が語られている。この伝承の中心にある日野川では砂鉄が採れ、孝靈天皇ゆかりの地は産鉄に関わっていた。鬼の名にしても、「蟹（カニ）」とは「カネ（金）」からの転化だとすれば、宮原の鬼伝承に語られる鬼の名大牛蟹とこの牛鬼は同じ意となり、鬼の正体は、頭が馬で胴が牛、足が猿の化け物のような、鉄を産する異形のものであったことになる。

そしてこの伝承で興味深いのは、楽々福の神とは実は孝靈天皇のことではなくその後のことであり、その名がまさに「フク」媛や「細（クワシ）」媛として伝えられていることである。一説では後の名が細媛、后が生んだ姫君の名が福媛であると伝えているが、いずれに

せよ「フク」とは「吹く」に通じ鉄を吹くことであり、「クワシ」にしても細かいことの意で砂鉄を指す言葉であって、福姫や細姫とは踏鞴に祀られる女神であった。

ところで印賀の楽々福神社には、孝靈天皇が鬼退治で留守にしていた時、一人残された姫君は、畑に育ったえんどう豆を採りにいった豆の蔕が絡みついた竹に目を衝かれ十五歳で死んでしまい、祭神として祭祀されるようになったという伝承がある。上安曇の楽々福神社には、好色な祭神が、ある晩よばいに行つて夜明けを告げる鶏の声に驚き、松葉に眼を突かれて片目になったため、境内には松を植えず、氏は鶏を飼わなくなつたと伝えられている。宮内では楽々福の神は片目の神で宮内の人々も片目が小さいのだと伝えられ、宮原では楽々福の神のは眼の悪い神だとされる。その他にも篠相の楽々福神社では竹を植えず、広瀬町石原の佐々布久神社では竹串を使つて育てるきゅうりなどの野菜を作らないというように、それらの伝承からは笹や竹を嫌う一つ目の神の姿が浮かび上がってくる（10）。それはまた、出雲西比田を本社とする金屋子神を想起させる鉄神の姿でもあった。

江戸時代に伯耆国日野郡の鉄師によつて書き残された『鉄山秘書』によれば、金屋子神はじめ播磨国宍粟郡千種に降臨したが、自ら西方に縁があるといつて白鷺に乗り、この西比田の地で桂の木で羽を休めていたところを発見されたという。犬に追いかけられ、蔕をつたつて逃れようとしたが途中で切れ、犬にかまれて死んだので犬

と蔕を嫌うらしい。あるいは犬に追いかけて麻に足をとられて死んだので犬と麻が嫌いだともいい、男神とする説もあるけれど、一般には女神であるとされる。その神は中国地方を中心に鍛冶屋に信仰され、播磨より来る途中に吉備中山に立ち寄つたという異伝もある（11）。

この踏鞴に祀られる女神金屋子神の姿こそまさに楽々福神の姿であり、その類似を思えば中世に信仰がはじまつた金屋子神の古形が楽々福神ではなかつたか。そして伯耆と金屋子神がはじめて降臨した播磨には、単に鉄の産地であるという以上の深い関係があるように思われてならない。鉄とは、その原料が採れるだけでは「鉄」にはならない。「鉄」に加工する製鉄の技術があつてはじめて「鉄」になる。これら地域間には、モノの交換のみならず、人々の交流や技術の伝播があつたのではなからうか。

3 吉備津彦と鬼退治

このように考えを進めていくと、最後にもう一人、楽々福鬼伝承で鍵となる人物、孝靈天皇の皇子である吉備津彦について考えなければならぬだろう。

吉備津彦とは孝靈天皇の第三子で、本来の名は彦五十狹芹彦命とあった。『古事記』によれば、吉備津彦のまたの名と思われる大吉備津彦命とその弟の若彦健吉備津彦命が吉備を平定しているが、『日本書紀』ではそのあたりの記述が少し異なり、第十代崇神天皇の命に

より、朝廷に服しない者たちを征伐すべく各国に遣わされた四道將軍の一人として吉備津彦は西道（山陽道）に派遣され、主に吉備の平定にあたったとある。その吉備征伐の目的は製鉄技術の掌握であったともされ、平定後の崇神紀六十年条には出雲国造の祖である出雲振根を吉備津彦が誅したことが記されていて、その勢力範囲を出雲へと伸ばしていったことがうかがえる。どうやら吉備津彦の平定には、鉄をめぐる抗争があったようだ。

また、吉備津神社（吉備津彦を祭神とする）の縁起で吉備津彦は、鬼ノ城に住む温羅という鬼を犬飼健、楽々森彦、留玉臣の三人の家来とともに倒し、その刎ねた鬼の首をさらしたが、犬に喰われようとも觸れになろうともその首が吠え続けるので、吉備津神社の釜の下に埋めたという。それでもなおその声は止まなかったある晩、吉備津彦の夢に温羅が現れて、その妻である阿曾姫に釜の祭祀をさせることを願い、釜は幸あれば豊かに鳴り、禍あれば荒らかに鳴ると告げたことが「鳴釜神事」の由来だと伝えられている⁽¹²⁾。

ここで家来の名に注目してみると、犬飼は犬に噛まれて死んだ金屋子神を、楽々森彦は楽々福の神を連想させ、これまで取り上げてきた鉄に関する三つの伝承には共通項が多くあることに気づかされる。吉備津神社の創建に関しても、仁徳天皇の御代、吉備津彦からくだること五代の孫である加夜臣奈留美命が、吉備津彦の御殿であった茅葺宮の跡に社殿を建てたことにはじまると伝えられており、宮原楽々福神社の「笹葺の社」に同じ発想の茅葺宮が神社創建に関

与している。このように中国地方に伝わる鬼伝承は、征伐するものや鬼の住む場所を変えながらもただ一つのプロットを持ち、いわば楽々福鬼伝承の変奏であったと考えられるのである。

さらに征伐するものが天皇やその皇子であることは、地方における産鉄集団の中央支配があったことを暗示している。孝靈天皇が伯耆を訪れる前に隠岐で黄魃鬼を退治したという伝承や、牛鬼退治をする齒黒皇子（ここでは吉備津彦ではない）もまた伯耆に来る前に備中で鬼と思われる蟹魁師を退治したという伝承が残されている。

そのようにして中央支配は繰り返し語られ、鬼退治はまた次の鬼退治へと語りつがれていった。

ではなぜ鬼伝承は、そのように鎖のように繋がっていくのだろうか。鬼退治をするのはある決まった人物であるという考えに基づいているからなのか。

おそらく鬼退治が次の鬼退治へと語り継がれていくことには、鬼退治伝承を更新していくような意味があるだろう。征伐の背後にあるのは鉄の原料確保という単純なことではなく、産鉄技術技術を携えた人々の移動や、それにとまなう新しい技術の伝播更新ではなかったか。征伐するものとされるものとの同化原理とは、古い鍛冶技術を持った集団が新しい鍛冶技術者集団によって征服されていく、そのような技術革新の過程なのかもしれない。

そもそも四道將軍の進軍は、それぞれ古代街道に沿ってなされている。平定の結果として都とその地を結ぶ街道は整備され、その道

を通じて人もモノも、技術も文化も往来する。そのように孝靈天皇の御代の征伐伝承を捉えることができるとしたら、楽々福鬼伝承をはじめとする一連の鬼伝承や鉄神の伝承は、古代鉄交易を語るものだといつてよいだろう。

むすび

因幡の東、播磨との国境である八頭郡若桜町にもオニ山と呼ばれる山があり、その対面には式内意非神社がある。若桜町歴史民俗資料館の学芸員の話によれば、それは古くは「意非の宮」と呼ばれ、かつては一ノ宮谷（香田）にあったが、武内宿禰が境内から放った矢が落ち、今の地に遷座したという。矢を放ったのは神の鎮座すべき地を定めるためであり、そのような神事の例は他にも多くあるのだから、この遷座に疑いをはさむ余地はない。

それでもな腑に落ちず気になってしまうのは、武内宿禰がどこへ向けて矢を放とうとしたのかということである。もしかしたら神社対面のオニ山に向けて矢を放ったのではないか、矢を放った本当の理由とは、鬼退治ではなかったのか。

オニ山はその名にオニとつくだけで、そこに鬼が住んでいたという伝承が残されているわけではない。とはいっても、オニ山の背後には鶴尾山という山があつて、その山頂には因幡三名城の一つに数えられる中世の山城鬼ヶ城があるのだから、楽々福の鬼住山や吉備の鬼ノ城を思いおこさずにはいられない。オニ山は鬼山であつたと

想像してしまいたくなる。武内宿禰が矢を射たのはオニ山に住む鬼を退治するためであり、意非神社の縁起譚には鬼退治伝承が隠ぺいされてしまっているのではないかと。

これは単なる幻想である。しかし武内宿禰とは、長きにわたって天皇に伝えた忠臣である。これまでの鬼伝承のプロットを考えてみると、鬼退治をするのは中央から派遣されたものであり、そこには朝廷による鉄の支配があつた。それはこの若狭町オニ山をめぐる伝承にもあてはまるだろう。オニ山周辺の山々には多くの鉱物が眠っている。八頭川を少し下った八頭町重枝にある式内布留多知神社には、不々岐（フブキ）と呼ばれた鬼をその祭神であるスサノヲが太刀で退治したという伝承が残されている。石をも切ったというその太刀の切れ味は、ここに優れた製鉄技術が古くから発達していたことを暗示しているのではないかと。

そして何よりも興味深いのは、この若狭町の立地である。若狭町は因幡の入り口であり、播磨へといたる街道がこの町を貫いている。金屋子神がはじめに天から降ってきた播磨国宍粟市千種町とは、県境をはさんで隣町といえる近さである。そのような立地と八頭川沿いに語られる鬼伝承は、一体何を語ろうとしているのか。

ここに浮きあがってみえてくるのは一筋の道である。播磨ら因幡へと到る道、鉄の産地を結ぶ道である。その道はさらに伯耆から隠岐や出雲とも繋がっており、鬼伝承を介しては吉備とも結ばれていく。播磨、因幡、伯耆、隠岐、出雲、吉備、それらを結ぶのは四道

將軍の征伐であり、中国山地を横断するようにして走る鉄脈に他ならない。それはまた鉄をめぐる人々が移動した痕跡であり、そのような人々によってもたらされた製鉄技術の伝播ルートでもあっただろう。楽々福鬼伝承をはじめとする、中国山地に伝わる鬼や鉄神に関する伝承の背後には、このような鉄をめぐる古代交易があったのである。

(明治大学文学部兼任講師)

【注】

- (1) 森納「因幡・伯耆の金属地名」(谷川健一編『金属と地名』三一書房一九九八年)
また『伯耆誌』(因伯叢書第四冊・名著出版一九七四年)によれば、民謡記や民談記には日野を簸野と書くものがあるという。
- (2) 「楽々福神社縁起」(『企画展 はじまりの物語』図録) 鳥取県立博物館二〇〇八年
- (3) 「楽々福神社縁起」(『企画展 はじまりの物語』図録) 鳥取県立博物館二〇〇八年
- (4) 広義の竹の中に笹は含まれる。
- (5) 大和岩雄『鬼と天皇』白水社一九九二年
- (6) 谷川健一編『日本の神々』7山陰・白水社二〇〇〇年
- (7) 柳田国男「一つ目小僧」(『一つ目小僧その他』角川文庫一九五四年)
- (8) 真弓常忠『古代の鉄と神々』学生社一九八五年

- (9) 「伯州日野郡楽々福大明神記録事」『日野郡史』名著出版一九七二年
- (10) (6)に同じ。
- (11) (6)に同じ。
- (12) 谷川健一編『日本の神々―神社と聖地』2山陽四国・白水社二〇〇〇年

【参考文献】

- 『鳥取県神社誌』一九三四年
『鳥取県史』一九七二年
『日野郡史』前篇・名著出版一九七二年
山中壽夫『鳥取県の歴史』山川出版一九七〇年
内藤正中・真田廣幸・日置衆佐エ門『鳥取県の歴史』一九九七年
窪田蔵郎『増補改訂 鉄の民俗史』雄山閣出版一九八六年
真弓常忠『日本古代祭祀と鉄』学生社一九八一年
谷川健一編『金属の文化誌』(日本民俗文化資料集成 10) 三一書房一九九一年